2019/02/27
I・HEAP

16 章：歴史的感覚の形成

Making Historical Sense

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）
ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

■著者情報

著者名：Sam Wineburg
研究関心：教育心理、歴史教育、社会科教育、教育評価等
経歴：Stanford 大学で Ph.D.（Psychological Studies in Education）を取得。1989 年からワシントン大学で教育心理学と歴史学の助教を務め、その後、教授として 2002 年まで同大学に務める。2002 年から Stanford 大学で教授を務める。歴史家の熟達者研究を始め、歴史的思考に関する論文、書籍を輩出。2018 年には新刊 ”Why Learn History (When It’s Already on Your Phone)”を出版している。

■重要な用語

・Behaviorism「行動主義」
・Historical Consciousness「歴史的意識」
・Historical Sense「歴史的感覚」

■議題

①教育の発展として、教室外で学んでいることを理解することは重要だが、
　その知見はどう継続的に更新でき、授業に反映できるのか
②テストは生徒の知らないことしか知られないというのはその通りだが、
　生徒が何を知っているかを知る継続的な方法は（インタビュー調査以外で）何があるか
③本調査の因果関係（家族や親の影響）の考察がやや信頼性に欠けるし、
　膨大なデータを紙幅の関係で省かれるのは研究手法的に問題があるのではないか

概要：

若者が現代の社会の中でどう「歴史的になっていくのか」を、インタビューを通して調査している。本章では、ベトナム戦争に関して両親、生徒にインタビューした事例を取り上げ、若者が客観的にベトナム戦争を見ている様子や、映画から歴史を学んでいる様子を明らかにしている。

■（イントロ）（pp.306-307）

①「子どもは歴史を知らない」ということは 1987 年の時点でも、1976 年の時点でも、
　1942 年の時点でも、そして 1917 年の時点でも言われている。
②国の評価は、生徒が何を知らないかは教えてくれるが、
　彼らが実際に何を知っており、どのようにそれを知ったのかはわからないままである。

■行動主義の遺産（pp.308-311）

①歴史の教育者にとって知らないものがあるというのは、行動主義の（良い？）遺産である。
　→子どもが学ぶべき事実を大人たちが同時に理解した
　→それによって、彼らはテストを作ったが、測定していない重要な何かを
　　若者が知っているとはほぼ思っていないだろう
②生徒の歴史的な不足に対して注意を向ける方略は、無味乾燥な教育の議論につながる
③認知革命は生徒が実際に教室の中で何を学んでいるかを理解する新しいレンズになった
　→これによって数学では誤概念などの知見を反映した教科書やカリキュラムができた
　→一方で歴史は 40 年前と同じ基準で教材がデザインされている
④アメリカの子ども達は、過去について考えや信念を持つ際、決して白紙状態ではない。
⑤歴史的意識は、個人-家族-国家-世界のようなきれいな円から発言してはおらず、複雑。
⑥もし現代の歴史的意識の特徴を理解したいならば、若者が現代の社会の中で
　どう「歴史的になっていくのか」を調査しなければならない

■過去についての思考（pp.311-312）

①Spencer Foundation からのグラントで 1996 年に縦断調査をスタートした
　→一般の人々が彼らの生活をどのように歴史的なものとして概念化していくかを調査
　→社会階層や授業形態が異なる 3 つの高校から 15 人の高校生を対象として選定
　→11 学年のアメリカの歴史を学ぶコースで、11 学年になる前から 1 年間調査
　→生徒の家族やコミュニティの歴史を含む、彼ら独自の過去をどう理解しているのかを
　　知るために、8 回のインタビューやフィールド調査を実施
　→生徒の文脈をより良く理解するため、親や教師にもインタビューを実施

■ベトナムに関するインタビュー（pp.313-321）

※紙幅の都合上、最もリッチで記録すべきデータとして、
　ベトナム戦争に対する親子のインタビュー調査のみを紹介している

<u>裸で逃げる子どもの写真を見た時の事例</u>

①6 つの象徴的な写真や絵（裸で逃げる子どもや、兵士が子どもを両脇に抱える写真など）を見せ、2 分ほどの音楽を 1 曲聞かせて、リアクションを書かせてからインタビューした。

②象徴的なものとして Delaney 家の事例を紹介
　→高校生の John は白人で、中流階級で、キリスト教徒で優等生的な存在
　→両親は 40 代半ばで身内にベトナム戦争の関係者はいない

③両親はベトナム戦争を、現在を形成し続ける核となる歴史だと認識し、感情的になっていた

④一方で John はベトナム戦争を直接的には知らず、距離を取れていたため、
　両親よりも客観的な意見を述べ、より良い歴史的な説明をしていた
　→まだ粗いものの、歴史的理解の認識を持っていた
　→感情は歴史学的にも、歴史的な客観性を脅かすもので重要な要素

⑤この特徴は Delaney 家特有のものではなく、他の高校でも見られ、おそらく高校ではなく、家族からの影響を受けているものだと考えられた

<u>兵士が両脇に子どもを抱えている写真を見た時の事例</u>

①兵士が両脇に子どもを抱えている写真を見た時、兵士＝人さらい or 救出者の 2 つの解釈ができるにも関わらず、John と両親は救出者だと考えた

②インタビューで ”baby killer”（軍事体制を批判するための、兵士を罵倒する悪口）が出た

→どこで知ったのか？（学校では 60 分しか扱っていない）

②John は「何かの本か自伝」で「戦争は経済的に良い」という話を始めた

→しかし、インタビューを進めていくとそのリソースは、スピルバーグのフィクション映画の『シンドラーのリスト』だということがわかった（＝彼はリソースを間違って認識していた）

③映画が過去の理解に対して大きな役割を果たしていたことは他の事例でも確認された

→Delaney 家は『フォレスト・ガンプ』をビデオテープで何度もリビングで見ていた

→とても良い映画だと評していた（戦争に関わった家族の友達はそのシーンで黙っていた）

→さらに、1960 年代のイメージも『フォレスト・ガンプ』から形成されており、”baby killer” もこの映画で使われていたことがわかった

④映画、ホームビデオは Delaney 家にとって、何度も過去を訪れる機会となっていた

→家族はハリウッドによって提供されたより大きい文化的な物語を媒介する形で、このビデオを歴史の授業の文脈として提供していた

■結論（pp.321-323）

①歴史の記憶は選択的なものである

→現代の社会的なプロセスによって取捨選択されたり、形成されたりする

②社会がどのように記憶しているのかを理解するためには、

マクロ、ミクロの両方から文化的な伝達、適応、再形成を分析しないといけない